

飯田市歴史研究所 第三期実績 外部評価

飯田市歴史研究所は、2003年以來、第一期（2003～07年度）、第二期（2008～12年度）の兩次にわたる中期計画に沿って事業活動を展開し、2013年度以來、第三期（2013～17年度）の活動に取り組んできた。今回、中期計画期間の見直しに伴い、当初の終了予定年度であった2017年度から1年以上前倒しする形で、2016年の現時点において、第三期の中期計画の進展状況を評価することになった。

2017年度からの第四期中期計画の策定を念頭に置きながら、第三期実績の自己点検・内部評価書をふまえて、外部評価委員として第三期のうち、2016年7月現在までの同所の事業活動について点検し、以下の評価を得たので、ここに報告する。

2016年8月10日

飯田市歴史研究所 外部評価委員
佐賀 朝

はじめに

本評価書では、飯田市歴史研究所（以下、歴研と略す）の第三期中期計画にもとづく事業活動について三つに区分して取り上げる。第一に、重点事業として掲げた「地域遺産」の再発見、「地域市民」との連携強化、地域アーカイブズ事業の充実の三つについて検討をくわえる。第二に、基本的事業活動を取り上げ、このうち特に、事業全体と史料調査・研究活動、学習活動、市誌編さん・出版事業の三つに言及する。第三に、研究所の体制整備に関する取り組みについて点検・評価を行う。ここでも市民研究員制度、文書館機能、スタッフの問題の三つに言及する。外部評価のために確保された期間も限られていた事情から、以上の三分野・計9項目を取り上げる形で、外部評価を行うこととする。

また、今回の外部評価は、様々な事情から佐賀一名が担当することとなったため、複数の委員による、より客観的な評価とは異なり、評価委員の私見がやや滲み出るものとなり、その点で限界を持つことも特に断っておきたい。

1. 重点三事業について

歴研は、第三期中期計画における重点事業として①「地域遺産」の再発見、②「地域市民」との連携強化、③地域アーカイブズ事業の充実、の三つを掲げた。以下では、計画そのものに関する評価にも触れつつ、各項目についての3年余りの事業活動を評価したい。

1) 「地域遺産」の再発見

第三期中期計画では「地域遺産」を「地域歴史遺産」「地域文化遺産」と言い換えている。同様の表現は、例えば大規模自然災害からの歴史資料保全活動を展開してきた歴史資料ネットワークの代表である奥村弘氏も「地域歴史遺産」という言葉を用いているように、現在、内外の多様な地域に残された歴史的・文化的遺産を、現代を生きる市民の共有財産とし、積極的に保存・活用する動きが各地で展開されている。したがって、こうした歴研の目標設定は、たいへん時宜にかなったものと評価できる。しかも、飯田歴研においては、

第一期以来の調査研究活動の蓄積の上に立って、歴史的根拠を持ちつつ現代の市民にとって意味ある実体としての地域を「単位地域」と捉え、それを地域遺産の調査・研究、保存・活用事業や地域市民との連携のための枠組みと設定している点が重要である。そこには、長期にわたる地域社会の歴史的蓄積を、一つの社会＝空間として押さえた上で、現代の市民がそこに集い、学び、活動する場として戦略的に設定する姿勢が見て取れよう。

こうした目標設定は、第三期における事業活動でも実際に活かされ、とりわけ座光寺地区において「歴史に学び地域を訪ねる会」との連携を通じて、旧支所文書・家文書や聞き取りなどの地域歴史資料の掘り起こしが進められた点は注目される。地区の史料を自治会的な組織が保全し収集するような例は、他地域でも存在するであろうが、歴研があり、共同作業や調査支援、学習活動支援などを通じて、こうした団体と系統的に連携することで、いわば市民自身が「地域遺産」を発掘し、自らのものとしていく取り組みとして高く評価できるだろう。こうした点は長野原地区の長野原歴史研究会も同様であろう。

なお、第三期自己点検・内部評価書（以下、本期内部評価と略す）では、単位地域により歴史資料や市民活動の蓄積などの条件が違ふことから生じる課題との関係で、現在進めつつある「歴史的景観ガイドブック」の出版計画が意味づけられている。確かに、本ガイドブックの計画では、地域市民による調査研究活動や、それとの共同による成果も活かされるようであるが、ガイドブックの趣旨や性格の全体像の中で、こうした意味づけは再吟味・再整理も必要ではなからうか。

また、本期内部評価では、2014年・15年の飯田市地域史研究集会の内容成果が、本項目に関わる成果として必ずしも位置づけられていないが、この二つの集会の成果はその記録を掲載した年報13号・14号（14号は2016年12月刊行予定）とともに、歴研の「地域遺産」再発見の視野の広さや、その理論的考察という点で重要な位置を占める。実質において地域市民そのものでもある調査研究員や近現代史ゼミメンバーを担い手とする聞き取りの取り組みの成果である口述資料の意義を、単に文字資料を補完するにとどまらないレベルで議論し深めようとした2014年集会、近年の歴史的・文化的景観の保存・活用の展開をふまえて、歴史的景観が持つ意味とそれを軸としたまちづくりの可能性を多角的に検討した2015年集会、いずれも本項目における重要な成果として、今後の活動に自覚的に活かされる必要があるだろう。

2) 「地域市民」との連携強化

すでに1)で地域市民との連携にも言及した。第三期中期計画に自覚的に説明されているように、「地域遺産」の発見と「地域市民」との連携は車の両輪の関係にある。

すでに触れた座光寺地区の「歴史に学び地域を訪ねる会」は、自治会の一組織でもあり、かつて存在した座光寺史学会の活動を継承する一方で、研究団体というよりも、地域の多様な史料の保全と活用をはかる集団としての性格を持つとのことである。歴研との具体的な共同や支援としては、近世・近代の村文書や在郷軍人会文書の整理の指導や共同作業、古墳や遺跡（恒川遺跡）の学習活動への支援、聞き取り調査に対する調査方法の指導および調査参加を行ってきたという。

また、長野原地区の長野原歴史研究会も、区有文書の整理を中心としながら、毎年テーマを決めて活動している団体であり、歴研は文書整理のサポートのほか、出前講座を開き、

研究支援金の交付も実施している。

こうした単位地域における地域市民の活動に、金銭的支援も含めたサポートを実施し、共同の活動を展開している点は、高く評価されよう。歴史資料の残存状況や、活動主体の存否やあり方など、地域的な条件の違いから、市域全体でくまなくこうした活動を展開することはもちろん困難であるが、そうした点を事業活動の限界と捉える必要はむしろなく、多様な主体的あるいは客観的条件をにらみつつ、こうした連携・共同事業を、一つずつ増やし、相互のネットワーク化も含めて、連携の輪を広げていく努力が大切であろう。

3) 地域アーカイブズ事業の充実

本事業も、地域遺産の発見や地域市民との連携と不可分の性格を持つ。第三期計画では、公私にわたる多様な地域アーカイブズの調査・収集・整理等の抜本的改善を掲げたが、旧支所文書の整理作業が大幅に進展するなど(南信濃 16242 点、上郷 3081 点、鼎 3748 点、下久堅 5265 点など)、一定の成果を上げた点は評価できよう。蓄積されてきたアーカイブの利用・公開に向けては課題も少なくないのは事実であるが、歴史資料の調査・収集・整理・保存・研究は、歴研の永続的で恒常的な事業であり、市民への公開に至る筋道をも含めた形で、息の長い持続的なサイクルを構築することが重要であろう。

上記の点にも関わって、本期内部評価で行政非現用文書の移管受け入れ活動に言及がないのは、重要な取り組みであるだけに、問題がないとは言えない。飯田市文書管理規程には、市役所の廃棄対象文書の一覧を歴研へ送付し、原課と折衝・調整の上で、歴史的・文化的価値を有する文書を歴研へ移管することが明記されており、実際、毎年、保存年限の切れた行政非現用文書の選別を研究員らが担当し、300～500 点ほどの移管を受け入れているとのことである。飯田市が文書館を設立することを前提に、当面の暫定的な任務としてこれを位置づけているのが現状であり、こうした文書館業務的な事業を歴研の活動に、どう位置づけるかは、課題となろう。

とはいえ、歴研で閲覧用に配架している各支所の戦前期の行政文書を見ても、実質的に、その歴史資料としての保存価値や活用可能性は民間保存文書と選ぶところはなく、両者を一体で保存・利用することが可能な現状は、歴史的調査・研究の立場から見て、積極的な意味を有すると考えられる。飯田市として現用・非現用にわたる文書管理・保存システムの構築という課題に正面から向き合うことが肝要であるが、こうした課題の少なくとも議論や検討にあたり、歴研が、歴史研究の観点から主体的・自覚的に発言し、それをリードしていくことが求められるのではないだろうか。この点、第四期中期計画において整理と位置づけが不可欠だと考える。

2. 基本的事業活動について

ここでは、基本的事業活動を取り上げ、このうち特に、事業全体と史料調査・研究活動、学習活動、市誌編さん・出版事業の三つに分けて評価を述べる。

1) 事業全体と史料調査・研究活動について

まず事業活動の成果と課題については、全体として順調な成果を上げているものの、内部評価では、市民と市役所内部への認知度やアピールが十分でないとの自己評価も見られ

る。前章で触れた行政文書への対応とも関わるが、まずは市役所内部における他部署との連携やそれを通じた市役所内外への成果「露出」に工夫と努力を加えることが、無理のない形で、中長期的な成果を少しずつ挙げていく近道ではないだろうか。この点、第四期の課題となる。

次に史料調査・研究活動について。前章の 2) 3) でもすでに触れたように、歴研の調査研究活動は、多くの局面で地域市民との連携を意識的に組み込んで多彩に展開されており、全体としては高く評価できるが、いくつか気になる点がある。

第一に、第三期中期計画では、基礎研究・基礎共同研究などの枠組みを見直すとしたが、本期内部評価では、その結果や帰趨についての説明が明瞭さを欠いているように思われる。この点を明確にし、次期の課題を展望する必要がある。

第二に、個人研究に関わる自己評価の中に、研究員による研究が実際には外部の研究助成などに依存して展開せざるをえず、研究所運営にわたる部分も含めた日常業務の多忙さも、こうした個人研究の順調な進展に制約を与えているとの指摘がある点には注意が必要である。これまで多くの若手研究者が歴研で地域に根ざした研究活動を経験することで、優れた歴史研究者として巣立っていった。第三期の終了を控え、こうしたこれまでの実績を正當にふまえることも重要である。とはいえ、歴研の研究事業活動の中核を担う研究員が、飯田の地でのびのびと個人研究を展開し、地域市民との接触を通じて育てていくためには、彼らの研究環境・条件に十二分に配慮する必要があり、この点、第四期の課題として意識する必要がある。これに関連する点は、3) でも述べたい。

2) 学習活動について

第三期においても歴研では、地域市民の歴史学習のために多様な場が提供された。従来からの研究集会、地域史講座、飯田アカデミア、各時代のゼミナールやワークショップにくわえ、本期には出前講義・授業に特に注力して展開されたと評価できる。出前の出張先も多様で、大学、美術博物館、公民館、中学校、まちづくり団体などに及んでいるほか、月 1.5～2 回程度のペースで実施している点も注目される。

なお、ゼミナールや地域史講座の参加者の「固定化」傾向は以前から課題として指摘されてきたようであるが、むしろ持続的に歴研の活動に参加するこうした人たちの存在はもっと重視されるべきではないか。本期内部評価では、遠山谷で実施した講座やワークショップをきっかけとして新たなゼミナール参加者が得られた例も報告されており、こうした形で活動を少しずつ広げていくことが、重要ではないかと思われる。参加層の拡大や増加を自己目的化して追求することよりも、こうした地道な努力と工夫をこそ求めたい。

3) 市誌編さんと出版事業について

第三期の市誌編さんと出版事業は、実質的に第二期の事業成果として刊行された『飯田・上飯田の歴史 上・下』という大きな成果をふまえ、引き続き活発かつ多彩に展開されたと評価できる。2016年3月末までに、史料叢書1冊、単位地域の全体史と聞き書き各2冊、ジュニア・ライブラリー1冊にくわえ、『戦争と養蚕の時代を語る』も刊行された。刊行支援事業の対象となった『胡桃澤盛日記』全7冊(別巻1冊を含む)や『下伊那から満州を考える』2冊も含めて、刊行物の冊数の多さと多彩さにも驚かされるものがあるが、その

内容や質の面も重要である。

例えば、『描かれた上飯田』は、明治初年に作成された上飯田村の地引絵図のビジュアルな解説ブックであるが、現在の地域市民が絵図の情報と現状とを対照しながら単位地域の歴史と社会＝空間をたどり、学ぶことのできる良質な手がかりとなるだろう。また、『戦争と養蚕の時代をかたる』も、調査研究員や近現代史ゼミナールの関係者の活動を反映した、歴研らしい成果であり、「満蒙移民を考える会」に対する刊行支援事業として出された『下伊那から満州を考える1・2』と並び、市民自身による歴史記録の取り組みとして、ユニークかつ高く評価される成果だと言えよう。

さらに歴研の出版事業としては、ジュニア・ライブラリーがひじょうに重要である。第三期の成果としては『飯田・下伊那の災害』が刊行されたが、本シリーズは未来の地域市民にわかりやすくビジュアルな通史を提供するだけでなく、具体的な史料や歴史遺産を素材とした構成を意識的に取っている点で、類例のない取り組みとして高く評価できる。本シリーズについては、学校側が求める主題設定をさらに意識的に追求すべきとの自己評価も出されているが、外部から見て、きわめて魅力的かつ適切な主題設定であり、こうした魅力的な素材を、実際の教育現場で用いる形で、現場の声もさらに汲み上げる工夫をしていくのがよいのではないだろうか。

なお、『飯田・上飯田の歴史』については、すでに書評会を通じた自己点検も行われているが、尼崎市立地域研究史料館（兵庫県）がすでに20年近くにわたり展開している「尼崎市史を読む会」「図説 尼崎の歴史を読む会」の取り組みなどを念頭におけば、歴研においても、こうした優れた刊行物をテキストにした連続講座を企画し、随時、その内容を市民と共有しつつ、検証をくわえ、あらたな成果を追加していく取り組みも考慮される必要があるだろう。

以上、歴研の基本的事業活動は、第三期においても、全体として多彩で質の高い、優れた成果を挙げていると思われる。自己評価には、現実に地域に山積する課題を念頭に、厳しいものも少なくなく、その点は歴研の担い手たちの真摯な姿勢の反映でもあるが、優れた成果の正当な自己評価をふまえて、現実に可能な工夫と着実な前進を意識的に課題化することも必要であろう。

3. 研究所の体制整備について

最後に、研究所の体制整備に関する取り組みについて点検・評価を行う。具体的には、市民研究員制度に関する問題、文書館機能の問題、スタッフの問題の三点について述べる。

まず市民研究員制度については、本期内部評価において研究活動のフォローが不十分であった点が改善の方向にあるとの指摘がある。本制度は、全国的にも例を見ないユニークな制度であり、さらに発展させる必要があるが、問題の所在や性格が必ずしも明瞭に分析されておらず、この点のていねいな吟味が期待される。

これに関わって、内部評価で課題とされた小中高の教員との連携強化とも連動させた改善策などが考慮されるべきではないだろうか。

次に、文書館機能の問題である。本期内部評価における歴研の体制整備の項では、この点について特に言及はないが、すでに1でも述べたように、本格的な文書館構想までの暫定的な対応という、それとしては消極的な歴研のこの問題への関わり方をどう考えるか、

この点は、今後の体制の問題とも関わる論点だと思われる。歴史的経緯と市内部の実状を正確に把握していない外部評価委員としては、踏み込んだ論評は差し控えるが、地域市民にとっては、民間文書も行政文書も歴史資料あるいは地域歴史遺産として、いずれも欠かせないものであり、これを歴研が包括的に取り扱う積極的意義もあると思われる。こうした点もふまえ、現用・非現用を一貫させた文書管理・保存システムの構築という飯田市全体としての課題も視野に、歴研が非現用行政文書の保存・活用のあり方について、積極的な議論や提言を行っていくことも期待したい。

最後に、スタッフの問題である。すでに第一期、第二期の外部評価でも指摘されてきたように、飯田市民のための「地域遺産」保存・活用事業を恒久的に進める上では、歴研の事業の中心的担い手である研究員の任期無し・常勤研究職化が課題となる。先述のように、歴研は、優れた若手研究者を輩出してきた実績を持ち、そうした研究者のうち、現在も調査研究員などとして歴研の活動に関わる人もいるが、任期の5年間に獲得された研究上・業務上の様々な蓄積が、その交代とともに外部に流出し続ける状況は、やはり望ましいことではない。単に、短期的な業務の渋滞にとどまらず、長期的に見て飯田市にとって、こうした損失が小さくないことは明らかであろう。第四期を迎えるにあたり、歴研そのものというよりは飯田市の課題として、歴研の恒久的な事業体制を支える人事制度の抜本的改善を希望したいところである。

おわりに

本外部評価書の作成にあたり、外部評価委員である筆者は、2016年7月9日、歴研を訪問、視察し、研究所の全体会議と「史料研究ノート」（月例研究会）にオブザーバーとして同席させていただいた。歴研は、全国唯一の自治体直営の歴史研究所として、多彩な活動を展開していることで知られているが、その内部で活動を支える人たちの日常的な仕事ぶりの一端をかいま見ることができて興味深かった。「史料研究ノート」も一見ささやかなミニ研究会であるが、所長や研究員だけでなく、地域市民でもある総務担当者も参加して、研究報告の対象とされた素材をめぐって議論が交わされる様子には、歴研の、多彩だが地に足の付いた活動を支える要素のようなものを感じ取ることができた。

歴研は、外部評価者のような県外の歴史研究者から常に注目を集めるだけでなく、その活動を担う多様な地域市民（研究者であれ、生活者であれ）の真摯で地道な努力に支えられ、この組織自体が、すでに地域に深く根をおろし、飯田市と飯田市民の宝になりつつあるのではないかと思われる。第四期中期計画策定にあたり、こうしたこれまでの蓄積を正當に継承し、一歩ずつ着実な前進を今後も続けるような事業活動が構想されることを希望したい。